

Iida, K. Genetics and “Breeding as a Science”: Kihara Hitoshi and the Development of Genetics in Japan in the First Half of the Twentieth Century. In: Philips and Kingsland (eds.), New Perspectives on the History of Life Sciences and Agriculture, Archimedes v. 40, pp 439-458.

(要旨和訳)

日本の著名な植物遺伝学者である木原均の足跡を通して、20世紀前半に日本の遺伝学が農業と密接な関係を持ちながら発展したことを示す。当時は、応用科学が高く評価されたため、木原は、そのような社会経済的背景に合わせ、次第に研究プロジェクトの実用的側面を強調するようになる。その結果、基礎科学とも応用科学とも言えるプロジェクトを創り出した。これらのプロジェクトは、戦時中、木原の研究グループの拡大につながっただけでなく、グループの科学的アプローチにも影響を与えた。研究者らは、生物への理解を深めるため、〔狭い意味での〕遺伝学にとどまることなくマルチディシプリナリー（学際的）なアプローチをとった。このアプローチは、ロシアの遺伝学者ニコライ・ヴァヴィロフが提唱していた「科学としての品種改良 (breeding as a science)」と似通ったものがある。この「科学としての品種改良」の中に位置付けられたことで、遺伝学自体も影響を受け、木原は、ドイツの遺伝学者リヒャルト・ゴルトシュミットが発展させた生理遺伝学を推奨するようになる。このように、木原の当時の研究活動を紐解くことで、農業重視の国策が、日本の遺伝学の学問的發展と生物や遺伝子に対する日本の生物学者のアプローチにいかに影響を与えたのかが見えてくる。